

組込み・アプリ・システムでソフト開発領域をカバー オリジナル製品開発で新たな事業軸を目指す

古くからのJASA会員である東信システムハウス(神奈川県川崎市)。主業務となる組込みソフト開発では、車載・医療・映像・印刷などIT/IoT端末機器など豊富な開発実績がある。業務アプリなどソリューション展開、さらにオリジナル製品開発と重ねる一方、教育や福利厚生面で充実度を高め、昨年は離職者ゼロを記録した。複数のJASA会員が拠点とする『かわさきマイコンシティ』の本社を訪ね話をうかがった。

なごや
代表取締役社長 **名児耶 真一氏**



組込みを主軸にソフト開発で多数実績

東信システムハウスの本社がある『かわさきマイコンシティ』は、通信・情報処理・ソフトウェア業などの研究開発機能が集積されたエリア。川崎市がかつての工業地帯や大手電機メーカーの拠点など古くからの環境を継承するように、産業クラスター化を目指し1985年に策定された地区計画だ。誘致時はJASAも会員向けに窓口として関わったことから、ほかにもSohwa&Sophia Technologies、コア、CICといった会員の開発拠点ともなっている。

そんな環境下で技術を研鑽し続ける東信システムハウスは1977年の創業、50周年も2年後に近づいてきた。電気・電子機器の受託開発を主業務とする東信電気を親会社に持つグループ会社の1社だ。代表取締役社長の名児耶真一氏は「東信電気はNECのエンジニアからスピンアウトした創業者が設立、今年75周年を迎えた。IT機器全般に対応し、主にはIT基板を受託製造するEMSサービスを展開していますが、そこからソフトウェア開発部門を分離して立ち上げた会社が東信システムハウスです」と成り立ちを教えてくれた。

そうした経緯から東信電気と共同で開発する案件も多い。技術センターとして機能する新潟営業所(長岡市)勤務を含め、現在50名を超えるエンジニアを擁し、受託開発を中心にデジタル社会のニーズに応えるべく業務を展開している。現状の業務について、名児耶氏は「組込みソフト開発とアプリケーションソフト、システム構築・運用サービスの3方向を柱に、ソフトウェア全体をカバーする位置づけで展開しています」と紹介する。

受託開発が中心のなか、業務の幅を広げようと積極的に展開しているのがアプリケーション開発になる。「WEB系のアプリケーション、モバイル系の基地局など応用分野を広げていきました」(名児耶氏)と、ビジネス寄りのソリューションを開発中だ。また、そうした開発ノウハウを生かし提供しているのがシステム構築サービス。構築から開発支援、運用管理、保守など一貫したサービスを企業や自治体に常駐するかたちで対応している。

ソフト開発はハードに近い領域にも対応

組込みソフト開発では「公共バスの音声案内システム、医療機器の透析装置、ロード

セルが用いられた小売店の買い物カード決済端末などの開発が進んでいます。昨年は放送映像機器のインターネット映像伝送の開発も携わりました。ミドルウェアやファームウェアなど、組込みソフトというよりハード系に近いところ、ほとんどハード開発の範疇のような案件が多い」と名児耶氏は話す。第二システム部部長の横田誠氏は「親会社と共同で進める製品開発でいえばハードに近いところで対応します。放送映像機器の例ではファームウェア開発としてはハーダルの高さを感じましたが、まずはチャレンジしてみよう」と対応したものです」という。

得意ということでは「制御技術は当社の強み」(横田氏)という。創業当時はプリンタの製品開発に多く関わってきた経緯があり、いまでも複合プリンタや業務用プリンタなどを制御する開発を中心にその技術力を発揮している。また昨今では、車載系の開発案件が増えているという。「営業所の長岡ではメーターまわりの制御など全員が車載系の開発に携わっています」(横田氏)。その傾向はアプリ開発でも表れているそうで、車載関連のソフト開発のボリュームが全体的に拡大しているようだ。



▲恒例となった夏のイベント
“とうしん夏祭り”的様子



▲組込みソフト開発の
技術力や開発製品は展示会でもアピール。
ET2018(右)とET20
19(上)の展示ブースの
様子



取締役 営業統括

安部 洋一郎氏



第二システム部 部長

横田 誠氏

引き合い増加中のオリジナル製品も

受託開発で多忙ななか、オリジナルの製品開発にも注力している。そのうちのひとつで、引き合いが増えているという製品がタブレット向けキッティング用ソフト。“キッティング”は端末のセットアップ作業を指すが、この『タブレットアドミン for キッティング』はAndroidデバイス用で、設定時間を手作業と比べ1/10に短縮し、スマホや組込み機器、ハンディターミナルなど各種Androidデバイスを40台まで一括設定が可能となる。オフラインでも使用できるUSB接続も特徴のひとつだが、ここへきてスーパーマーケットでの活用が広がりつつあるようだ。

横田氏は「当初想定したニーズとは異なりますが」と苦笑しつつ、「先ほどふれたような決済端末となる買い物カードを使用しているスーパーで、端末を一度に大量にキッティングする用途での引き合いが増えています」という。

こうしたオリジナルの製品開発には積極的にチャレンジしていく考えだ。名児耶氏は「もう一つの軸として、ニーズに合わせてちょっとカスタマイズすれば提案できるようなものを目指したい。まずは受託開発のメンバーを中心に得意な組込みソフト開発の強みを活かしながら具体策を検討しています」と教えてくれた。

勉強会や四季のイベントでモチベーション向上

社員の教育にも余念がない。新卒者に限っている新入社員への研修について、取締役営業統括の安部洋一郎氏は「C言語を中心に3ヵ月弱の研修をおこなっています。学校でゲームをつくるなど経験のある新入社員ならメンターとして先輩がついて1年ほどOJTをおこないます」と説明する。資格取得に向けても、情報処理技術者試験の講座を専門学校から先生を招いて実施している。「模擬試験をおこなうなど勉強するモチベーションアップにつながるので、そこから1~2回で合格する人も出る内容です。受験費用も3回までは会社が負担します」(安部氏)。

インターンシップもおこなっていて、年1~2名平均で受け入れている。安部氏によると「お盆休み明けから10営業日に実施しています。SE希望者が多く、その役割を認識してもらうためにも最初に商品を企画してそのプレゼンをしてもらい、後半は評価仕様書をつくってもらう。3~4回プレゼンする機会が出てきますが、それで自信をつけてくれます。のちに入社した社員もいます」。なかには大学に戻ったあとの発表会で優秀賞を受賞した学生もいたそうだ。

昨年には全員を対象にコミュニケーション能力を高める勉強会も実施している。名

児耶氏は「社会人のリテラシーであり実際お客様先に出向く機会も多い。コミュニケーションの基本的な内容ですが、講師を招いて全員参加で実施しました」と意図を話す。こうした集合研修を定期的におこなっているが、この4月からはそれぞれ階層別を見据えた教育を強化するべくeラーニングを導入し実践していく予定としている。

また同社の特徴となるのが、楽しいイベント企画。仕事始めの餅つきに始まり花見やバーベキュー、社会見学など、その時々で盛り上がる催しをおこなっている。夏祭り会場を再現したかのような本格的な模擬店も用意、家族やその年の内定者も含め全員で楽しむ。社員への還元という思いがあり「会社への愛情を感じていただいて、なるべく長く勤めてもらえれば」と名児耶氏。その甲斐もあって、昨年の離職率はゼロだったという。

とはいっても、社員の採用には常に頭を悩ませているのが実情。会員に共通する悩みともいえるが、名児耶氏は「同じ悩みを持つ会員に向けてサポートいただける仕組みがあればありがたいなと思います」。昨今では、企業と従業員間の深い関係性を指す従業員エンゲージメントが注目されているが、その向上の好例とも言えそうな同社の活動は大いに参考になるだろう。

●「会社訪問」のコーナーでは、掲載を希望される会員企業を募集しています。お気軽にJASAまでお問い合わせください。